

蕪村筆維駒本(上・下巻)  
奥の細道画卷

〔上巻〕

月日は百代の過客にして、行かふ年も  
又旅人なり。舟のうへに生涯をうかへ、馬の  
口とらえて老をむかふるものハ、日々旅にして  
旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。  
予もいつれの年よりか、片雲の風にさそはれて、  
漂泊のおもひやます、海浜にさすらへ、去年の秋、  
江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、  
や、としもくれ、春立る霞の空に、  
白川の関こへんと、そ、ろ神のものにつきて心を  
くるハせ、道祖神のまねきにあひて、  
取もの手につかす。も、引のやふれをつり、  
笠の緒付かへて、三里に灸すゆるより、  
松しまの月先心にかゝりて、住るかたハ人に譲り、  
杉風か別墅にうつるに、  
草の戸も住替る代や難の家  
面八句を庵の柱にかけ置。やよひも末の七日、  
明ほの、空朧々として、月是有明にて光おさまれ  
る物から、不二の峰幽にみへて、上野・谷中の花  
の梢、又いつかハと心ほそし。むつまじきかきり  
は宵よりつとひて、舟にのりて送る。千しゆとい  
ふところにて舟を上れハ、前途三千里のおもひ胸  
にふたかりて、  
幻のちまたに離別のなみたをそ、く。  
行春や鳥啼魚の目ハ泪

千住

草の戸も住替る代や難の家  
面八句を庵の柱にかけ置。やよひも末の七日、  
明ほの、空朧々として、月是有明にて光おさまれ  
る物から、不二の峰幽にみへて、上野・谷中の花  
の梢、又いつかハと心ほそし。むつまじきかきり  
は宵よりつとひて、舟にのりて送る。千しゆとい  
ふところにて舟を上れハ、前途三千里のおもひ胸  
にふたかりて、  
幻のちまたに離別のなみたをそ、く。  
行春や鳥啼魚の目ハ泪

蕪村筆  
奥の細道  
千住  
行春や鳥啼魚の目ハ泪  
文選古詩 王魚横河由 日風風鷹  
木南春望詩 感時花濺淚 恨別鳥啼心  
才樂府 村魚過河泣 何時還復入  
日田子也 趣向の句なまべしとある。



蕪村筆  
奥の細道  
千住  
行春や鳥啼魚の目ハ泪  
文選古詩 王魚横河由 日風風鷹  
木南春望詩 感時花濺淚 恨別鳥啼心  
才樂府 村魚過河泣 何時還復入  
日田子也 趣向の句なまべしとある。

元禄三  
三月廿七日  
5月16日 1689

舟中

合巻八巻

舟中  
これを見たてのはしめとして、行道なを  
す、ます。人々は途中に立ならひて、後かけの  
見ゆるまでハと見送るなるへし。ことし元禄  
二とせにや、奥羽長途の行脚只かりそめに  
おもひたちて、異天に白髮の恨を重  
ぬといへとも、耳にふれて、また目に見ぬさかひ  
もし生で帰らばと、定なき頼の末をかけて、  
其日漸早加といふ宿にたとり着にけり。  
瘦骨の肩にか、れるもの、先くるしむ。只身  
すからにと出立侍るを、紙子一衣ハ夜  
のふせき、ゆかた・雨具・墨・筆のたくひ、あるハ  
さりかたき錢などしたるハ、さすかに打すて  
かたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

室のやしに詣す。同行曾良か曰、「この神ハ、  
この花さくやひめの神と申て、不二二昧也。  
無戸室に入て焼給ふちかひのみ中に、火々出見の  
みこと生れ給ひしより、むろのやしと申。又煙  
をよみならし侍るも、此謂也」はた、このしろ  
といふ魚を禁す。縁記の旨、世に伝ふ事も侍し。

廿日日光山の禁に泊る。あるしの云けるやう、  
「我名を仏五左衛門と云。萬正直を旨とする故に、  
人かくハ申侍るま、一夜の草のまくらも、打と  
けて休給へ」と云。いかなる仏の濁世塵土に示現  
して、か、る桑門の乞食巡礼こときの人をたすけ  
て給ふにやと、あるしのなすことに心をと、めて  
みるに、唯無智無別にして、正直偏固のものなり。  
剛毅木訥の仁にちかきたくひ、氣稟の清質尤  
尊ふへし。  
卯月朔日、御山に詣押す。往昔、此御山を二荒山  
と書しを、空海大師開基の時、日光と改給ふ。  
千歳末來をさとり給ふにやと、此御光一天にか、  
やきて、恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖おたや  
かなり。なをば、かり多くて筆をさし置ぬ。  
あらとうと青葉若葉の日の光  
黒かみ山ハ、霞か、りて、雪にまた白し。  
削すて、くろかみ山に更衣 曾良

廿日日光山の禁に泊る。あるしの云けるやう、  
「我名を仏五左衛門と云。萬正直を旨とする故に、  
人かくハ申侍るま、一夜の草のまくらも、打と  
けて休給へ」と云。いかなる仏の濁世塵土に示現  
して、か、る桑門の乞食巡礼こときの人をたすけ  
て給ふにやと、あるしのなすことに心をと、めて  
みるに、唯無智無別にして、正直偏固のものなり。  
剛毅木訥の仁にちかきたくひ、氣稟の清質尤  
尊ふへし。  
卯月朔日、御山に詣押す。往昔、此御山を二荒山  
と書しを、空海大師開基の時、日光と改給ふ。  
千歳末來をさとり給ふにやと、此御光一天にか、  
やきて、恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖おたや  
かなり。なをば、かり多くて筆をさし置ぬ。  
あらとうと青葉若葉の日の光  
黒かみ山ハ、霞か、りて、雪にまた白し。  
削すて、くろかみ山に更衣 曾良

日光

廿日、日光山の禁に泊る。あるしの云けるやう、  
「我名を仏五左衛門と云。萬正直を旨とする故に、  
人かくハ申侍るま、一夜の草のまくらも、打と  
けて休給へ」と云。いかなる仏の濁世塵土に示現  
して、か、る桑門の乞食巡礼こときの人をたすけ  
て給ふにやと、あるしのなすことに心をと、めて  
みるに、唯無智無別にして、正直偏固のものなり。  
剛毅木訥の仁にちかきたくひ、氣稟の清質尤  
尊ふへし。  
卯月朔日、御山に詣押す。往昔、此御山を二荒山  
と書しを、空海大師開基の時、日光と改給ふ。  
千歳末來をさとり給ふにやと、此御光一天にか、  
やきて、恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖おたや  
かなり。なをば、かり多くて筆をさし置ぬ。  
あらとうと青葉若葉の日の光  
黒かみ山ハ、霞か、りて、雪にまた白し。  
削すて、くろかみ山に更衣 曾良

曾良は、河合氏にして惣五郎と云り。芭蕉の  
下葉に軒をならへて、予か薪水の勞をたすく。  
このたひ松しま・きさかたの眺共にせん事を悦ひ、  
且ハ羈旅の難をいたはらんと、旅立曉、髪を  
剃て、墨染にさまをかへ、惣五を改て宗悟とす。  
仍て黒かみ山の句有。衣更の二字、力ありて聞ゆ。  
廿余丁山を登て滝有。岩洞の頂より飛流して百尺、  
千岩の碧潭に落たり。岩窟に身をひそめ入て、  
滝の裏よりみれば、うらみのたきと申伝へ侍也。  
しはらくハ滝にこもるや夏の初  
那須の黒はねと云ところ知人あれハ、是より  
野越にか、りて、直道を行んとす。遙に一村を見か  
けて行に、兩落日暮る。農夫の家に一夜をかりて、  
明けハ又野中を行。そこに野飼の馬有。草刈おの  
こになけきよれハ、野夫といへとも、さすかに情  
しらぬにハあらず。「いか、すへきや。されども  
此野は縦横にわかれて、うい／＼しき旅人の道ふ  
みたかへん、あやしう侍れハ、此馬のと、まると

ころにて馬を返し給へ」とかし侍ぬ。ちいさきものふたり、馬のあとしたひではしる。ひとりハ小姫にて、名をかさねと云。聞なれぬ名のやさしければ、かさねとハ八重なてしこの名なるへし。曾良やかて人里に至れハ、あたひを鞍つほに結付て馬を返しぬ。



黒羽の館代浄坊寺何かしのかたに音信る。おもひかけぬあるしの悦ひ、日夜かたりつ、けて其弟桃梨など云か、朝夕つとめとふらひ、自の家にも伴ひて、親族のかたにもまねかれ、日ふるまに、日とひ郊外に逍遙して、犬追ふもの、あとを一見し、那須の篠はらわけて、玉藻の前の古墳をとふ。それより八幡宮に詣。「与市扇の的を射し時「別して我国氏神正八まん」とちかひしも、此神社にて侍」と聞ハ、感応ことにしきりに覚へらる。暮れハ、桃梨宅に帰る。修験光明寺と云有。そこにまねかれて行者堂を拜す。夏山に足駄を拜む首途かな。当国雲岸寺のおくに、仏頂和尚山居の跡有。堅横の五尺にたらぬ草の庵。むすふもくやし雨なかりせはと、松の炭して岩に書付侍り、といつそや聞へ給ふ。其跡みんと、雲岸寺に杖を曳。人々す、んで共にいさなひ、若き人おほく、道のほど打さハきにて、おほえすかの禁に到る。山ハおくあるけしきにて、谷道はるかに、松、杉黒く、苦した、りて、卯月の天、今なを寒し。十景盡るところ、橋をわたりにて山門に入。と、よりあえぬ一句を柱のこし侍し。是より殺生行に行。館代より馬にて送らる。此口付のおのこ、「短冊得させよ」と乞。やさしき事を望待るものかなと、野を横に馬ひきまけよほと、きす

黒羽

黒羽の館代浄坊寺何かしのかたに音信る。おもひかけぬあるしの悦ひ、日夜かたりつ、けて其弟桃梨など云か、朝夕つとめとふらひ、自の家にも伴ひて、親族のかたにもまねかれ、日ふるまに、日とひ郊外に逍遙して、犬追ふもの、あとを一見し、那須の篠はらわけて、玉藻の前の古墳をとふ。それより八幡宮に詣。「与市扇の的を射し時「別して我国氏神正八まん」とちかひしも、此神社にて侍」と聞ハ、感応ことにしきりに覚へらる。暮れハ、桃梨宅に帰る。修験光明寺と云有。そこにまねかれて行者堂を拜す。夏山に足駄を拜む首途かな。当国雲岸寺のおくに、仏頂和尚山居の跡有。堅横の五尺にたらぬ草の庵。むすふもくやし雨なかりせはと、松の炭して岩に書付侍り、といつそや聞へ給ふ。其跡みんと、雲岸寺に杖を曳。人々す、んで共にいさなひ、若き人おほく、道のほど打さハきにて、おほえすかの禁に到る。山ハおくあるけしきにて、谷道はるかに、松、杉黒く、苦した、りて、卯月の天、今なを寒し。十景盡るところ、橋をわたりにて山門に入。

知書

と、よりあえぬ一句を柱のこし侍し。是より殺生行に行。館代より馬にて送らる。此口付のおのこ、「短冊得させよ」と乞。やさしき事を望待るものかなと、野を横に馬ひきまけよほと、きす

3) 都をば國ともは立すしとこも立すどまりんれ(西行)

殺生石

世野

殺生石ハ温泉の出る山陰に有。石の毒氣いまたほろひす、蜂・蝶のたくひ、真砂の色の見へぬほどかさなり死す。又、清水なかる、の柳ハ、海野の里にありて、田の畔にのこる。此所の郡守戸部某の、「此柳見せばや」など、折々の給ひ聞へ給ふを、いつくのほどにやとおもひしを、けふ此柳のかけにこそ 立より侍れ。

田一枚植て立去柳哉

白河

こゝろもとなき日かす重なるまゝに、白河の関にかかりて旅心定りぬ。いかて都へと便求しもことハリ也。中にも此関ハ三関の一にして、風俗の人、心をとむ。秋風を耳に残し、紅葉を備にして、青葉の梢をあはれ也。うの花の白妙に、茨の花の咲そひて、雪にもこゆるこゝ地をす。古人冠を正し衣装を改し事など、清輔の筆にもと、め置れしとぞ。

うの花をかさしに関のはれ着哉 曾良

名沼

左に会津根高、右に岩城・相馬・三春の庄、常陸・下野の地をさかひて山つらなる。かけ沼と云所を行に、けふハ空翠て物影うつらす。すか川宿の駅に等弱といふものを尋て、四、五日と、めらる先、「白河の関いかにこへつるや」と問。「長途のくるしみ、身心つかれ、且は風景に魂うハ、れ、懐旧に腸をたちて、はかくしうおもひめぐらす。

風流のはしめやおくの田植うた 無下にこえんもさすかに」とかたれば、脇・第三とつ、けて三巻となしぬ。

此宿のかたはらに大なる栗の木陰をたのみて、世をいとふ僧有。機ひるふ大山もかくやと、間に覚へられて、ものに書付侍る。其詞。

栗といふ文字ハ、西の木と書て、西方浄土に便ありと、行基菩薩の一生、杖にも柱にも此木を用給ふとかや。世の人の見付ぬ花や軒の栗

- 2) にもよりあはれがて都へ言やらんは白河の関は越之ぬと(早蕪)
- 4) もせじ葉のまぐくはぬに散しけは名のみはりけり白河の関(左大臣親宗)
- 5) 群にはまだ青葉を見しかども紅葉散りしく白河の源頼政

6) 見と過る人しはれば卯の世はつ 咲る榎や白河の関(藤原季遠)



東路七年も 末にやなりぬらん雪ふりにけり白河の関(伊勢印株) 8) 藤原清輔 花を菓子に 竹田大天國行 遠話

西方浄土に便ありと、行基菩薩の一生、杖にも柱にも此木を用給ふとかや。世の人の見付ぬ花や軒の栗

栗といふ文字ハ、西の木と書て、西方浄土に便ありと、行基菩薩の一生、杖にも柱にも此木を用給ふとかや。世の人の見付ぬ花や軒の栗